以下の文章は、人民新聞社宛に送られて来た「日本赤軍」の総括文章である。五年前の五月三〇日、イスラエルの首都、テルアビブのリッダ空港で、PFLP（パレスチナ解放戦線）と日本赤軍によってリッダ闘争が闘われた。その闘いの評価はともかく、それが、六〇年代後半から七〇年にかけて、多くの学生、青年労働者が担って来た新左翼運動を、極限まで突き進めた二つの闘いであったことは事実である。

今、その後のさまざまな経緯の中で、彼らは自らの闘った、その闘いの総括を始めている。自らの敗北を、敗北として認め、二度と再び同じ誤りを繰り返すことのないために、徹底した総括作業を人民の前に明かにする意図で、この文章が人民新聞社に送られて来たものであろうと考え、ここに全文を掲載した。

客観情勢の激変とにつまりは益々、その情勢に応えうる主体の形成を緊急なものとしつつある。その困難な作業は、過去、自らが闘った闘いの徹底した総括なしに進めようもない。全国各地で、この情勢に応えるべく、たゆむことなく積み重ねられている。こうした努力に応える問題提起として、紙面を提供する意味が十分あると判断したからだ。

尚、この総括文章に至る、各個人の総括も何らかのかたちで公表して行きたいと考えている。

人民新聞編集部

五・三〇リッダ闘争五周年によせて——
団結をめざし、団結をもとめ、団結を武器としよう！

日本赤軍

リッダ闘争を闘い抜いた故奥平・安田両君

1

日本赤軍の誕生日ともいえる五月三〇日を迎え、更なる不屈の、革命任務を担う決意を込めて、日本人民、同志友人に日本赤軍に結集した全ての戦士の名において、心から連帯のあいさつをおくります。私たちが、日本人民を代表して、アラブ・パレスチナ人民と手を握り合って六年目、リッダ闘争から五年目の、五月三〇日を迎えようとしています。その間私たちは少なくない革命の教訓を一つづつ導き出そうとしてきました。私たちは、失敗を救えきれない程してきました。そして、失敗を克服する闘いの中から、自らを革命化することを通して、不滅の生命力を養うことを学んで来ました。今、私達は日本人民、同志友人と共に日本革命を勝利完成する闘いの中にささやかな教訓を返し、一つの階級の責務を共に担いつづけることを約束します。

日本革命をめざす者が、日本のことを知らなければ、闘う方向を見失ってしまうことは、道理ですが、日本赤軍形成母体であった若い革命運動の勇気と情熱、ごうまんと主観主義の例外にもれず、私たちも又、多かれ、少なかれ、日本の中で教訓を蓄積しないまま、自らの失敗を正当化し、自らに幻想をたくさん抱いたまま、日本人民のことを真剣に知りえず、アラブでの闘いに出発して来ました。多難の中で、うまくいかなければ情況や対象や時代のせいだ、と思ったり、うまくいけば自分たちの実力を過信するという様な、根本の思想が、帝国主義支配の中で育くんだ思想基盤をしらずしらずに肯定したところでしか、闘いきれていませんでした。だから、連赤や諸派の失敗があれば、革命を志す者の共通の責任としてとらえず、自分たちは闘っていて、まちがいをおかさないのに、新左翼はダメだという固定的な見方・批判をもって、自分たちだけが苦労して革命を担っているという様な悲壮な観点によってたっていたといえます。私たちは、数えきれない教訓を一つ一つ得る度に、その中から勝利の確信を一つ一つうちかためて来ました。そして今も又、その途上にあります。抑圧された人々が、歴史の主人公となり、自らの力で、未来を切り拓く正義の闘いは、いかなる困難に直面しようとも、必ず勝利するという確信は、闘えば闘う程、失敗すれば失敗を通して、ゆるぎない確信となって、私たちを支えています。そして、勝利の確信が強まれば強まる程、どの国の革命でもそうである様に、無名の先達が、勝利によって証した様に、私たちも又、団結を唯一の武器として闘って初めて、日本革命を勝利完成させることが、出来るのだと実感しています。

私たちは敵共によって、又、私たち自身の不十分さの中から、この六年間の間に、真に日本赤軍が一体何を考え、どの様な社会を実現する為に闘っているのかを、日本の人民、同志、友人に伝えることが、出来ませんでした。私たちの闘いの不十分さに加え、武装闘争に対する神秘主義や、アラブ、パレスチナ革命戦場に対するブルジョアマスコミのゆがんだ伝達を通し、日本の人民・同志・友人と一致団結して闘う道をきりひらきえていません。日本の人民・同志・友人と共に担う階級的団結ぬきには、私たちは、敵共を壊滅することができません。私たちは、日本赤軍に対するこれまでの誤解や、神秘主義、そして批判を、まず自らの不十分性の結果として、うけとめていきたいと思います。そして、自己を更に批判的に改造するところから、日本帝国主義に対決する抑圧人民・同志・友人と団結し、力をあわせて、日本の人民共和国を実現する為に闘いつづけることを約束します。

2

人民の利益を実現し、人民の団結をめざすいかなる闘いも、無限の後続部隊を歴史の中に育成し、闘う人々へ引きつがれてきたように、日本赤軍の先達が切り拓いたリッダ闘争は、今、益々したたかに、アラブ、日本人民連帯の礎石となって拡がりゆく闘いを支えています。しかし、同時に日本赤軍はリッダ闘争によって示された国際主義の実現の中で、その切り拓いた責務の大きさを、しっかりと果たしえず、十分に人民連帯を、日本の革命運動へと、実践しきれてきませんでした。唯、武装闘争を持続発展させる中から、リッダ闘争の非妥協の闘いの地平を堅持しぬくことにとどまってきました。パレスチナ人民との共同武装闘争であるリッダ闘争の非妥協な敵との対峙は、担い手たる私たちの即自的な主観的展望を越えて、はるかに持久的で広い階級的団結を、客観的に不滅なものとして築きました。それは、パレスチナ人民の闘いの地平に支えられ、私達や、パレスチナ指導勢力の階級的な飛躍を要求していたといえます。

しかし、私達日本赤軍は、自らが限界や不充分性をもって闘ったというリッダ闘争の主体的な内容を問わずに来ました。リッダ闘争を勝利の側面からのみとらえ、その地平を発展させることに全精力を費してきました。日本赤軍の当時の思想的未熟さを問い、高める方法を、武装闘争の飛躍によってのみ問い、革命任務を、武装闘争の持続に一面化する軍事一点ばりの観点をもって闘いつづけて来ました。そのことから、武装闘争の勝利によって、逆に思想的未熟さや、不充分性を清算しながら、運動的発展に依存し、強固なものと錯覚し、隊伍の中味を十分に問わずに来ました。パレスチナ指導勢力も又、同じ問題を問わずに来たのだと、私達日本赤軍は考えています。リッダ闘争そのものが、客観的に実現した階級利益の闘い、国際主義の実現とうらはらに、私達日本赤軍は犠牲性や勇気にとどまらない真の革命思想へと、自己を革命化することに遅れて来ました。そのことを真剣に問い得たのは、同志の被逮捕、自供によってでありました。

リッダ闘争を実現する日本赤軍の初期の不十分性は、日本革命運動の不十分性と照応する関係にあります。未経験や、思想的立場の無自覚さ、不徹底さ故に、帝国主義支配の価値基準を知らず知らずに肯定した自己の立場を、闘いの中で、革命していくことに、頓着して来なかったということが言えます。革命を理念的にとらえ、生活を基盤とした力を組織しきれて来ませんでした。私達は、日本の革命運動が、敵との非妥協な思想性によって対峙しえていない観念論議であることに反発し、逆に、自らは行動によって、非妥協性を実現することを自己目的化する狭い世界観に立脚していたと言えます。革命思想の生きた

たたかいのなかから

〈投稿歓迎〉

こりページは各地の運動の闘争報告、論争、本紙への批判を含む雑感など、読者のページとしてお使い下さい。投稿を大歓迎します。匿名希望の方は、その旨はっきり明記するか、あらかじめペンネームでお寄せ下さい。特別の場合を除いて原稿は極力短く（五〇〇字前後）お願いします。できるだけ全文を掲載しますが、紙面の都合上カットさせざるを得ない場合もあります。あらかじめ御了解下さい。

〈「闘いの中から」係〉

パラオは日本のゴミ捨場じゃない

ミクロネシア・パラオ　モーゼス・ウルドン

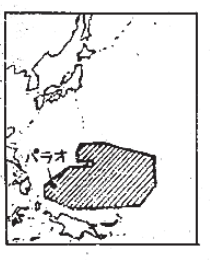
日本の皆さん、とりわけ公害に関心を持っておられる団体の皆さんに、現在パラオにもくろまれている超港湾計画、CTS計画をやめさせる私たちのたたかいを支援していただくよう心からお願いします。

私たちは大変美しい島々を持っています。それらはまだ汚染されていません。日本が現在、公害で汚染されていることを、私たちは知っています。そして日本の企業がその公害をパラオに輸出することを、私たちは望んでいません。

日本企業である日商岩井と日本興業銀行が計画しているCTS計画は、私たちのためのものではなく、パラオの経済を発展させることでもありません。それは日本の企業と産業のためのものなのです。

私たちは、私たちの島々が、私たちのまわりの海が、日本の産業のためのゴミ捨て場にされることを許すわけにはいきません。

このCTS計画で、日本は、日本の企業は利益を得ます。なぜならば日本は石油を使い、石油を必要としているからです。



イランもまたその石油を日本に売って利益を上げます。しかし、私たちパラオの民衆は何ひとつ利益を得ることはありません。石油は私たちのものではないし、CTSも私たちのものではありません。

CTSはパラオの島々をだいなしにしてしまうのです。しかも、その代償として何かを得ることもないのです。いったん島が破壊されたならば、私たちにそれをとりもどす術はありません。私たちは生きていくことができないのです。

ですから日本の皆さん、日本のいろいろな団体の皆さんにお願いします。日本の多国籍企業と石油会社に反対する私たちの闘いに手助けをして下さい。

ブルジョア文化批判・攻撃の軸を

神奈川　東　迅一

人民新聞は疲れた労働者の目にも、なじみやすい編集をしようと努力していることが、うかがわれます。しかし残念なことに、意識的に購読しようとする人々はまだ限られているでしょう。そして何よりも、ブルジョアイデオロギーに組み込まれた学問や芸術や知識に対する幻想に、多くの人々が惑わされている現実を、なかなか突破しえないということがあります。

私が関わりを持っているマンガの世界も、資本のあくなき利益追求の論理がはびこっており、特にマンガ界は、全てが口約束で成立する立身出世、商業的作品中心主義、徒弟制的人間関係のはびこる、奇怪な世界です。そしてここにも、ブルジョアイデオロギーとして価値観が襲撃し、出版資本はこの二つの背景をテコに、描き手や出版労働者、読者からの搾取と収奪を続けてきました。そして、このようなブルジョアイデオロギーの枠を越えてしまうような、内容、表現、生きかたを持つ作品や作家は、徹底して排除されてきました。私の感想では、マンガはもちろん、学問や芸術、そして文化に対しての労働者側の批判や攻撃がなされない……というよりも、労働者側で、そういうことをやっていける〝軸〟が出来ていない事が問題ではないかと思います。

蛇足ですが、出版労働者のつながりで商業主義の世界から排除されてきた作家の特集を〝激画ジャック〟でやれそうです。本屋で立読みして下さい。

私たちが、日本の民衆、日本の様々なグループ、そしてその他の公害反対運動とともに、石油産業、多国籍企業による破壊に反対し、団結してともにたたかったならば、必ずや勝利するであろうことを確信します。

これをもって日本の皆さんに対する私たちの要請とメッセージとします。

（月報「公害を許すな！」七七年五月号）

「禁止」「隔離」では育たない

—児童撲殺事件の波紋—

教育とは何だ

□3□

京都の山科で小学生がゴルフクラブで撲殺されるという事件が起った。犯人も原因もわかってはいないが、この事件の波紋は大きく、学校、PTA、自治会、家主の育て方、教育の仕方の大きな誤りが産み出されるのではないかとで事件の防止の方策を打ち出している。警察の犯人捜しとそれに乗じた地域支配の確立という側面もあるようだが、それ以上にいわゆる文化住宅の建ち並ぶ市街地の親や教師の「子育て」「教育」の問題がえぐり出されていることが、この事件の波紋を大きくしている。

ある先生は「事件後、校長がことさらに訓辞をしている。知らない人とは口をきかないよう、一人で遊びに行かないよう、登校下校は必らず集団で、といった内容なのだが、この訓辞がPTA、自治会等の協力で熱心に実行されている。事件が大変なことはよくわかるが、色んなことが、子供らしいことが、人として当然なことが、禁止されていく。こんな方法で事件がなくなったり子供が守られたりするのだろうか。どこかおかしい。この誤りが行き過ぎると、犯人をめぐっての大きな誤りと子供が、人として当然なことが、禁止されていく。こんな方法で事件がなくなったり子供が守られたりするのだろうか。どこかおかしい。この誤りが行き過ぎると、犯人をめぐっての大きな誤りと子供が、色んなことが、子供らしいことが